「自分が仕事で追い求めてきたものは他者から羨ましがられる生活だった」

社会人2人に聞く Light プロジェクト「信仰と仕事コース」

信仰と仕事ミニストリー「Light プロジェクト」（ディレクター・サックス知子）の「信仰と仕事セミナー」が9月23日、オンラインで開催された。テーマは「職場で信仰使ってる？」。当日は2人のスピーカーの話を聞くと共に、参加者同士でディスカッションの時を持った。

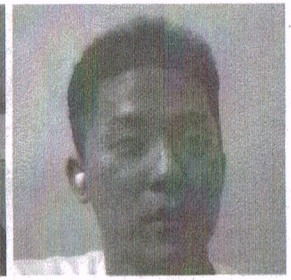
◇　◆　◇

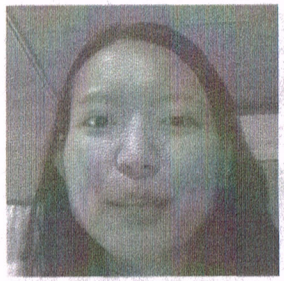
最初のスピーカーは、通信会社勤務の阪口春奈さん。就職して3年目で、営業職として働く。「社会人になって1年目の終わりにクリスチャンになり、自分の価値観も大きく変わった。自分はクリスチャンとしてどう働くべきか、数値目標に常に追い立てられて社内でクリスチャンとしてどう働くことができるのか分からず、助けを必要としていたが、NCC（ニュー！コミュニティ・チャーチ）東京で Light プロジェクトの話があり、信仰と仕事コースを受講した」

受講したばかりの頃は「無意識のうちに仕事を自分のアイデンティティーとして捉え、仕事にしがみついて夜遅くまで仕事をしていた。職場で優秀と思われなければ、自分がここに存在する意義はないと自分を追い込んでいた」と言う。

「本来、仕事は良いものであり、神様に祝福されたものであることを学んだ。この仕事を、自分の欲や心の弱さを補う偶像として捉えていたために、人に仕える仕事、祝福された仕事とはかけはなれた働きになっていたことを自覚させられた」

「仕事の悩みは、私一人ではなく、多くの人にも共通していたことに驚いた」とも言う。「年齢や職業、クリスチャン歴も様々だが、各々の悩みや講義で学んだことを分かち合うと、皆同じような悩みを抱えて奮闘していることが分かり、大変励まされた。職場での悩みを遠慮なく打ち明けることができ、この交わりの時間に癒やされている」


成川寛人さん


阪口春奈さん

仕事の奴隷にならないため境界線引く

「自分自身の仕事の捉え方を見つめ直すようになった」とも話す。「以前は数字を達成させて評価してもらうことに必至だったが、徐々にその重荷から解放され、目の前にいるメンバーに仕えるためにこの職場に遣わされたんだと思えるようになった」

「まだ仕事の奴隷となる体質があるが、平日にギターのレッスンやフィットネスジムの予定を入れて、仕事に境界線を引いている」とも明かした。

二人目は、総合商社勤務の成川寛人さん。海外の鉱山から鉱石を調達し、日本の精錬所に販売する営業職として働く。「仕事においてはまじめに働いていたものの残業続きで、会社と家の往復のみの生活。部署のマネジメントも良くなく、心が荒んでいく感じがあった。同期が海外駐在、転職、起業する中で、自分はこのままでいいのかと思うようになった」と明かす。

そんな中、Light プロジェクトを知り、2019年秋のコースを受講。「ごく普通の社会生活、信仰生活を続けているが、自分の心は神様から遠く離れていた。自分自身が自分の救い主になろうとしていることに気づかされた」と語る。「職場でまじめに働いていれば、いつか神様は報いてくれるはず。教会にも通っているし神様に泥を塗るようなこともしていない。自分の努力や行動によって神様を支配し、望むものを手に入れ続けていた」

「まるで放蕩息子の兄のような者だった。父のそばにいながら父を愛さず、父の持っているものを欲しがっただけ。自分が追い求めてきたものは神様でなく、他者から羨ましがられる生活、経済的安定、人間関係であり、それらが自分を幸せにし、満足させるものだと信じていた。だから仕事や日常生活は神様からの愛も喜びもなく、奴隷がするような単調なものだった」

「このような自分が神様のもとに帰るためには、悔い改めて、心を方向転換しないといけないことに気づかされていた。だが、悪いと思うことだけでなく、自分が正しいと考えていることは何なのか、正しさの根本を見つめる必要があると思わされた。自分の正しさの後ろにある罪、神様以外のものに希望や信頼を置いていたこと、欲しいものを得るため自分の努力と行動で神様をコントロールしていたこと、それらの偶像礼拝をまず見て、時間をかけて悔い改めなければいけないと感じた」

「一方、自分の努力で神様に立ち返る必要はない、憐れみは無条件に、無償で与えられていることも頭では知っていた」と成川さん。「この救いを味わい尽くすのは今日明日ではできないが、これまで勘違いして抱えていたものを手放し、神様に譲りながら、職場、仕事場において福音を味わっていこうと思った」と語った。

スピーカーの話を聞いた後、参加者は数グループに分かれ、「仕事を通して自分は何を得ようとしているのか。その内に潜む偶像は何なのか」などについて話し合った。参加者からは、「上からの評価が大事なので、神様より人に認められるために仕事をしていた」、「評価されることを望んでしまうため、神様との交わりの時間や自分の時間を削って残業していた」、「神様に頼りたいけれど、自分の力でコントロールしたいという欲求が強い。それが自分の中に潜む偶像ではないかと思う」、「講師の仕事をしているので、先生と呼ばれることが多く、『先生、さすがですね』と言われるとうれしくなってしまう。それを再現しようとしている自分がいて、神様のためよりは、自分を喜ばすためにしていた」などの声が聞かれ、周りから認められたい、評価されたい、存在価値を見出したい、といった共通の課題が浮き彫りになった。